

住の地産地建が環境を守り地域を甦らす

3 地域の資源と工法で建てる家は、中山間地の維持と伝統技術の継承への最大貢献

住宅は、人生の最大の投資物件、時期が来ればたいい誰もが家を建てます。私が住む飯田下伊那地域を例に採ると、当地域には約6万世帯の人々が暮らしていますが、地域内で持家、借家等合わせて毎年およそ1000戸の住宅の新築があります。1戸の平均建築費を3,000万円とすると年間の投資総額は300億円。これが毎年投資されていますが、その大部分は県外等のハウジングメーカーに吸収されています。これに比べて例えば飯田市の一般会計に占める建設事業費は40億程度ですから毎年300億の民間投資の大きさがおわかりになると思います。

これらを地域の資源と伝統工法で造ることとなれば、一部資材費を除いても下伊那地域に投下される金額は、200億余となります。これを、仮に年収200万の職人給で割返せば1万人の雇用が生まれるわけです。もともと、左官、大工、林業家等は、農業も兼業していることが多く、農業収入と併せればそれなりの暮らしが維持できます。また、山の手入れも継続でき、林業や製材施設での雇用の確保にも繋がるわけです。

市街地の住人もこの点を理解し、全ての住宅や小規模事業所等を地域資源と伝統工法で建てることにより、今まさに消えゆくとしている中山間地の暮らしが維持されると共に、職人等の伝統技術も継承され当地の歴史文化も維持されていくのです。中山間地の最大の活性化策であり、環境保全や地方らしい景観形成にも繋がります。住民への意識啓発や推進のための支援措置などに対する行政の責任は大きいはずですが、ほとんど認識されていません。

山間地から都市部に移住して住宅を建てる若い世代には特に一考して欲しいものです。家づくりが木材等の地域資材を産出する中山間地域やそこに暮らす林家や職人等の生活と密接に結びついていることを。

コマーシャルに釣られ某ハウスメーカーの家を建てると云うことは、そういう中山間地域の資源利用を放棄し職人の仕事を奪っていくこと、すなわち都市部で利便良く自由に暮らす一方で残してきた両親などの住む中山間地域の衰退に追い打ちをかけている・・・という現実を認識して欲しいものです。

そんなことに思いも馳せず目先だけの家づくりをしながら、中山間地域の活性化を叫んでも空しいだけではないでしょうか。